

本論文は

世界経済評論 2020年9/10月号

(2020年9月発行)

掲載の記事です



世界経済評論 定期購読のご案内

年間購読料

1,320円×6冊=7,920円

6,600円

税込

17%

送料無料

OFF

富士山マガジンサービス限定特典

※通巻682号以降

定期購読
期間中

デジタル版バックナンバー 読み放題!!



世界経済評論 定期購読



0120-223-223

[24時間・年中無休]

お支払い方法

Webでお申込みの場合はクレジットカード・銀行振込・コンビニ払いからお選びいただけます。
お電話でお申込みの場合は銀行振込・コンビニ払いのみとなります。

Fujisan.co.jp
雑誌のオンライン書店



高木 文平

アジア通株式会社代表取締役

中国庶民に“どっこい生きる”^{かななぎ} 巫・儒教精神

新型コロナウイルスの出現は大自然からの現代文明への警告と受け止めるべきだろう。

100年に一度とも言われたが、実は500年、1000年単位で見るべきものだ。この点では自然を制御する近代哲学、近代科学を基本とする西欧近代文明500年の歴史スパンではとても手に余る現象と言える。アジア、特に東アジアではコロナ抑制にけた違いの成功を収めている事実のなかに、大げさに言えば同地域の文化伝統が重要な役割を果たしたのではないか。

文化伝統で相通ずる日本と中国の原初と歴史的な思想が、現在にどう生き続けているかを吟味したい。

中国の^{かななぎ}「巫」思想

日本で影響のある中国思想の筆頭に挙げられるのは儒教である。「論語」は日本人の精神性の重要な一部を形成してきた。だが創始者の孔子以前、中国の庶民思想に大きく影響した「巫史（ふし）伝統」を忘れてはならない。

中国文化を理解するうえで、二つの要素を把握しておく必要がある。

一つは血縁集族に基礎を置く氏族体制であり、二つ目が合理化（理性化）された巫史伝統である。この二要素は一体となって時代に応じて形を変化させて今日に至っている。社会主義社会の今でもこの事実が変わりはない。

「巫」（ふ：中国読み wu）とは一体何だろうか。広辞苑によれば「神にいつき仕え神楽を奏して神慮をなだめ、また神慮を伺い、神おろしを行いなどする人」とある。巫は古来祖先崇拜が神の世界との関わりを深めながら、ともに継承されてきた。神の世界は自然が表徴する超自然の世界でもある。人の生と死、人と神の境界

は截然としないまま暮らしの中に生きている。

「巫」は神の世界と人を繋ぐ存在である。古くは王は最大の巫として俗界と神界に君臨した。全ての王が巫であったのか、民衆は王が巫である証をどこで判断していたのか、王位を篡奪して新王になった実力者を、民衆は巫と認めただのかなど歴史の好奇心は尽きない。

巫のガバナンスは今風に言えば情報収集力と政治的決断、指導力によって表される。「巫君一体化」思想は社会の底流に脈々と生きていると見てよい。

巫は自然の秩序（神の世界）に対する象徴的な儀式を、人間の社会生活に移し替えてその秩序にその権威と合理性を与えた。長い歴史の中で繰り返しの結果、象徴的な秩序は世界の秩序であるという意識が生まれた。

儀式が固定化されるにつれてその中から神秘的、権威的な数字を抽象され、所謂「数字化概念」が人間世界の最も完備された秩序の象徴として尊ばれるようになった。

その智慧と儀式は「卜筮」（ぼくぜい）として維持されている。「卜筮」の最大の特徴は意外にも数学演算である。神と人を繋ぐ「巫」がどうして数学に結びついたのか。

統治には充実した徴税が不可欠で、税の体系、税収の管理などで数学演算が重視されたとも考えられる。あるいは正確な暦の確立の必要から演算が発達したとも推定される。商、周の時代には巫は数学者でもあった。儀式は「数」や「記号」によって合理化され、記号、操作が象徴する変容を遂げた。その結果、王のガバナ

ンスや社会秩序に関する継承は、周公の「制礼作楽」として制度化されて中国の大伝統となり、中国文化の根幹となった。中国の伝統の根幹を数学的要素が構成している事実は、自然の感性のなかで育まれた日本文化の伝統とは一線を画す側面を表している。

「制礼作楽」には例えば、周公が「河図洛書」から編集した「周易」にその全容が窺われる。自然の規則、農業社会の智慧と技能、治国平天下の理論をすべて包含している。

因みに中国にはこの大伝統に対して、自然由来の小伝統が祝・史などの専門職を通じて民間に流布され、後に道教、墨家、陰陽等として今に残っている。

孔子は「周礼」に含まれている神の似姿としての心を知的に説く概念として「仁」を唱道した。「礼記・楽記」には「礼也者、理之不可易也」（礼というのは、理性的本性の節度で、代替できない規則である。礼の意味は、儀礼的作法によって人間社会の組織化、制度化を図る）と記され、孔子はこれを「子曰、人而不仁、如礼何、人而不仁、如楽何」（子いわく、人にして仁ならずんば、礼をいかにせん。人にして仁ならずんば、楽をいかにせん。——人を思う真心がなければ礼儀正しくしたとしても無意味である）と著わした。周公が「巫の礼儀」の外形を整えて「制礼作楽」を設けたが、孔子はそれを内省化して「仁」を唱えた。「仁」とは一言でいえば「愛人」（即ち人を愛すること）である。

「仁」は人間の本性を見つめた上で、日常の生活、行為、言語に具体的に表れるもので、時代、民族・国家、宗教、貧富に関わりなく人の心で共有されており、古来神代の時代から継承されてきたものである。これが儒教の本質である。この本質は巫儀式から変形した道教、墨家、そして後の仏教にも影響を与えている。

中国庶民が継承する文化の源流

現在の中国では儒教、仏教は学理以外、社会的に殆ど存在感を失っているが、三字経、千字文のような伝統的学習書を通じて親から子へ代々伝わっており、その精神性は民衆に浸透していると言っている。

政治体制の転換が民衆の精神性にどういう影響を与えているだろうか。

筆者の小・中学校時代は所謂「文化大革命」の最中で、孔子思想は激しく批判された。多くの知識人、幹部は批判されていた。一方家庭では「人を大事にする、人が不運の時にいじめてはいけない」と両親から聞かされたものだ。今振り返るとそれは正に儒教の基本であった。

日本では昨今渋沢栄一が書いた「論語と算盤」が改めて読まれている。渋沢は飽くなき富の追求に対して論語の一節を引いて「正当の道を踏んで得らるるならば、執鞭の士となっても宜いから富を積み、しかしながら不正当の手段を取るくらいなら、むしろ貧賤におれ」と説いている。

一方本家の中国では、近年、何十年ぶりに一般の書店で「論語」とその解説書が売られている。初等・中等教育では「論語」は古典として教えられる。小学生が「論語」を暗記することも珍しくない。

ビジネスマンも「論語」「老子」等古典を読むようになっている。

しかし、全体から見て教育、教養としての儒教は日本の方がもっと充実している。中国では、主流の社会主義思想から見て、儒教はあくまで傍流である。これは、日中両国における近代化の歩みに因るものである。

日本の近代化は最初から、和魂洋才、孔子を含めて伝統思想を大事している。

一方、中国では、近代化遅れの焦りで、伝統

文化を徹底的に否定し、批判する。その伝統思想批判を原点として近代化を目指して来た。100年を経て、教育としての儒教は衰退しているが、儒教伝統は中国人の血液に流れているように、親から子供に代々と伝わって、生活習慣そのものになっている。正に「百姓日用爾不知」（百姓は日常至る所に「道」を見るが、これを理解できる君子は少ない）の通り、儒教の生命力は日常に満ちている。

仏教はどうだろうか。日本では禅に関する本は根強いファンを持っているが、中国で禅についての本を書店で見ると、辛うじてどこかの片隅に置いてあるのを見つける。禅を分かる人は殆どいない。

仏教が学理以外に社会的な存在感を失っている一つの例は葬儀である。最近の日本でも結婚式は神前、葬儀は仏式、大晦日の年越しはお寺で正月の初詣は神社といった具合に、中国人ならずとも外国人には日本人の宗教感覚が理解しがたい。本来の宗教としての意義を失っているようにも見える。

中国の結婚式に宗教の色彩はすっかり失われている。天に向かって拝礼、両親に向けて拝礼という形が見られる程度である。

中国の葬儀は日本の仏式とは全く異なる。決まった葬礼歌を流して、故人の人生を辿って追慕するという形が普通である。僧侶は当然暮らしの視界から見失われている。

中国の家庭には日本でよく見かける仏壇に相当するものはない。お墓は土地の開発会社が管理する墓地にある。命日や四十九日などの供養には個人の好きなお酒、食べ物を備えるのが通例である。日本で見られる仏壇に戒名を記した位牌に相当するものは、墓碑業者が生前の氏名に「**居士」と名入れするだけである。

中国語に日本から輸入された漢字、いわば和製漢字が2000もあると知る人は両国でも少な

い。日本には中国文化が輸入され神道、儒教、仏教が溶け込んだ独自の日本文化が生まれた。

日本の枯山水様式の庭園はその一つである。石と白砂の世界から海や風、溪谷やせせらぎを具象化して簡素・静寂・無という禅の世界を描く。一方中国の庭園は太湖石等を配置して完成された個性的空間を醸し出している。

日本の茶道は「和敬清寂」を基軸に礼と形を重んじた作法のなかに、禅の侘・寂が融合して「俗のなかの崇高」という美意識を完成させている。これに対して中国の茶文化は庶民化されて実用本位になっており、友人との談笑やビジネスの場で楽しく味わうのが茶ということになっている。

日中間の政治の世界は折に触れて曲折してきたのは当然であろう。大事なのは時の政府間のズレに関係なく、両国の市民レベル、庶民同士の相互理解と交流の努力は常に前進を続けるべきだということである。両国の文化は共通していると思いつつも、実は内実が異なっている場合がある。他方、異文化だと理解していたものが、暮らしのなかでは所詮同じ人間同士だと気づく例も少なくない。

要はお互いに膝付き合わせた暮らしのレベルでの突合せの場が両国で少ないということであろう。公式ミッションの往来以外に、両国のNPOレベルで「おばさんたちの場」があってもよい。

(たかぎ ふみひら)